



時代対照年表		
年代	日本 王統	日本・沖縄・浦添の主な事項
古代	平安時代	1187 舜天即位と伝わるこの頃浦添グスク築城
	鎌倉時代	1192 源頼朝、鎌倉幕府開く
	室町時代	1260 英祖即位と伝わる
	室町時代	1265～1274 極楽山（浦添ようどれ）・極楽寺造営
中世	南北朝時代	1274 蒙古襲来（文永の役）
	南北朝時代	1314 三山対立始まるこの頃浦添グスクの規模が拡大
	南北朝時代	1350 察度即位と伝わる
	南北朝時代	14世紀前半 浦添ようどれの石垣造営～15世紀前半（発掘調査）
近世	江戸時代	1406 浦添グスク滅びるこの頃から浦添グスク荒れ果てる
	江戸時代	1429 尚巴志、三山統一
	江戸時代	1470 尚円の即位
	江戸時代	1477 尚眞の即位
近代	明治時代	16世紀初頭 尚維衡、浦添グスクに居住
	明治時代	1589 浦添出身の尚寧、国王となる
	明治時代	1603 徳川家康、江戸幕府開く
	明治時代	1609 薩摩侵入で、浦添グスク落城
現代	昭和時代	1620 尚寧王、浦添ようどれを改修して一族の墓を移す
	昭和時代	1759 尚寧王妃の遺骨を天山陵から移葬
	昭和時代	1768 浦添ようどれ・玉陵ではじめて清明祭を行う大地震で浦添ようどれの石垣所々崩壊浦添グスクに番所があったと伝わる
	平成時代	1852 「右御墓」（西室）の「殉死ノ者共」の骨を厨子に納める
現代	平成時代	1853 ベリー・浦賢に來航、那覇にも寄港
	平成時代	1879 沖縄県設置
	平成時代	1945 沖縄戦で浦添ようどれ壊滅
	平成時代	1955 琉球政府が浦添ようどれの墓室を修復
現代	令和時代	1972 沖縄日本復帰
	令和時代	2005 浦添ようどれの復元完了



貿易立国の基礎を築いた王。

察度

察度は1372年に明の皇帝の招きに応じて使者を送り、初めて中国と正式に国交を結びました。また留学生も派遣しています。

伝説に
つつまれた王。

舜天

父親は源為朝、母親は大里按司の妹といわれ、若くして浦添按司となり、1187年に国王・天孫氏から王位を奪った利勇を倒し、人々に推されて王になりました。

首里城と浦添城をつないだ王。

尚寧

1609年に薩摩の島津氏が攻めてきて、琉球は敗れました。尚寧は捕虜として薩摩や江戸に連行され、二年後に琉球へ帰ってきます。

太陽の子といわれた王。

英祖

1260年に義本から王位を譲られたといわれます。父親は伊祖城にいた伊祖按司で、恵祖世主と呼ばれていました。

歴代の王たちの眠る墓

浦添ようどれ
浦添城跡の北側崖下にある王陵で、岩陰を掘り広げて二つの墓室を造っています。向かって右側が英祖王、左側が尚寧王の墓といわれており、内部に安置された石厨子は県の文化財に指定されています。

浦添御殿の墓
浦添城跡の北側崖下にある王陵で、岩陰を掘り広げて二つの墓室を造っています。向かって右側が英祖王、左側が尚寧王の墓といわれており、内部に安置された石厨子は県の文化財に指定されています。

第二尚氏14代国王「尚穆（しょうぼく）」の第二子「尚図（しょうと）」またの名を「浦添朝央」（うらそえちやうおう）を祖とする浦添家の墓です。

「御殿」とは、王の一族の敬称です。浦添家は、代々浦添を領地として浦添間切（現浦添市）の按司地頭を務め、近世琉球を代表する政治家や文化人を輩出した由緒ある家系でした。墓の造営は18世紀末とされ、市内でも最大級の亀甲墓で、浦添家の栄華を今に伝えています。